

発達障害ではないかとの不安を抱く学生の背景にあるもの

—「感性教育」によってもたらされたある男子学生の人格的成長—

学医（精神科医）人間科学部教授 小林 隆 児

今日の精神科医療現場では発達障害が疑われる患者が激増しているが、学生相談に訪れる学生にも自分が発達障害ではないかとの不安を抱いている者が少なくない。彼らの不安の理由は様々ではあるが、そこに共通しているのは自分の内面に蠢くこころの揺れ動きへの強い戸惑いがあるのではなからうか。もともと人間のこころには他者と深く繋がり合いたい気持ちと自分らしくありたい気持ちが同居していて、それらが左右に揺れ動きながらもどうにか自分を保ち続けているものである。このような揺れ動くこころのありようは人によっては心地よいものとはならず、逆に強い不安を誘発する。それゆえ極力揺れ動かないように躍起になる。自分でこうあるべきだという考えにしがみつ়くことで安定を図ろうとするのはその一つの対処法である。そうすると、他者の話を聞いて受け止め、理解しながら自分なりに吸収するということが容易にはできなくなり、自分の考えに侵入する他者の考えを排除したくなるものである。

ある年、ゼミで出会った男子学生がまさにそのような対人的態度を見せていた。しかし、1年半、私のゼミで「感性教育」を体験するなかで劇的に変化し、人間的に大きく成長した。彼はゼミの終わりに「異なる意見も視点を変えることで納得できる」と題した体験談をつぎのように語った。

「1年半ゼミに参加するなかで、私は人を観察する力がついたと感じた。それは日常生活においても実感できる。ゼミを始める前は自分と考えが合わない人の意見は聞かない、もしくは聞き流すことが多かった。例えば、アルバイトで客がクレームを入れたときにも、とりあえずあしらうくらいのことしかなかった。しかし、ゼミを通して一見自分が共感できない意見でも視点を変えることで納得できるということを実感した。アルバイトで客がクレームを入れた時に、少し違った考えをするよう意識するようになった。その結果、客の表情が180度変わるということが起こった。（略）またゼミで最初は自分の意見が正しいかどうかを考えすぎるあまり、自分の意見や考えをあまり出せないことが多かった。しかし、ゼミでの議論を積み重ねていくうちに、正解はたくさんあるということに気づかされた。その結果、今でも考えることは多いが、自分の意見を全く出せないということはなくなった。社会の中で様々な視点で物事を見るということの大切さを学んだ。」

当初自分を守ろうとして、自分の考え方に執着していた彼が、率直に思いを語り合うゼミを通して、同じ対象を観察しても人によってものの見方が異なることの発見と同時に、逆に一見同じように思えても、よくよく語り合うと見方が異なるのだという発見を味わっている。それまで頑なまでに自分を守るため、相手の意見を排除しようとしてきた彼が、視点を換えることによって相手をよりよく理解することができるようになったと実感をもって語っている。

私が「感性教育」での対話でもっとも重視しているのは、相手の発言内容を丁寧に尋ね合うことで、自己理解を通した他者理解を深めることにあるが、その成果がこの学生の体験談にとってもよく見て取れて、私は深い感銘を覚えた。彼の人格的成長は「感性教育」の最大の成果の一つである。